

明月記をめぐる射場保昭と神田茂・井本進との交わり

竹本修三

〈NPO法人あいんしゅたいん附置基礎科学研究所 〒606-8317 京都市左京区吉田本町5-14〉
e-mail: takemoto@dance.plala.or.jp

射場保昭は「明月記」に超新星を含む客星出現の記録などが記載されていることを1934年に英文で米国のPopular Astronomy誌に紹介した。明月記にこのような天文記録があることを射場に伝え、英文報告の作成に協力したのは、東京天文台の神田茂と射場天体観測所・客員研究員の井本進であった。この三人の交遊関係を残された資料に基づき調べた結果を報告する。また、射場保昭の報告がPopular Astronomy誌に掲載される過程で、同誌のC. H. キングリッチ編集長から射場に宛てた4通の興味深い手紙が新たに発見されたので、これらについても紹介する。

1. はじめに

「明月記」に記載されている超新星を含む客星出現の記録を英文で海外で紹介したのは、神戸在住のアマチュア天文家の射場保昭(1894-1957)であった。射場がこの英文報告をまとめるに至った経緯については、1987年発行の「日本アマチュア天文史」(恒星社厚生閣)に佐久間精一による次のような記述がある¹⁾。

【神田茂が日本の天文古記録を調べて「日本天文史料」を刊行したのが1935年であるが、神田の了解を得て日本の天文資料の概要をアメリカで紹介したのは、神戸在住のアマチュア天文家射場保昭であった。このうち明月記(藤原定家著)に記された、客星出現例の「天喜二年四月中旬以後、丑時客星出彗参度、見東方、葦天関星、大如歳星」が1054年の超新星とかに星雲とを結びつける有力な証拠となった。中国の客星の記事は位置は割に詳しく記されているが、光度の記録を欠く場合が多い。射場の記事の「大きさ歳星の如し」を注目したのはMayallであった。現在天文学の研究対象の花型になっているかに星雲に

専門家の目を向けるきっかけを作った射場氏の投稿の意義は大きい。】

この佐久間の見解を最初の拠り所として、射場保昭が「明月記」に記載されている超新星を含む客星出現の記録を英文で海外で紹介した経緯を調べてみた。

2. 神田茂と射場保昭の出会い

神田茂(1894-1974)は、1920年に東京帝国大学理学部天文学科を卒業後、東京天文台に勤務し、理科年表の編纂などに従事した。神田は1931(昭和6)年から東照宮三百年記念会より研究費の補助を受けて、わが国の天文暦学史料と天文記録の調査を全国的に行った。その成果として、日本学術振興会の援助のもとに「日本天文史料総覧」と「日本天文史料」を1934-35(昭和9-10)年に刊行した。

射場保昭の遺品の中に神田茂編「日本天文史料総覧」の初版本と再版本があった。初版本は1934(昭和9)年10月20日印刷、同年10月25日発行、編者・発行者: 神田茂、印刷者: 島廉太郎、印刷所: 三秀舎で、全232ページに追補233-247ページが付いている。再版本は、印刷・発行日は同じであるが、1935(昭和10)年11月25日再版と

なっていて、印刷・編者・発行者・印刷者・印刷所も同じであるが、その後、発売所・丸善株式会社・恒星社が付け加えられている。再版本は追補も含めた全247ページの本であり、ここには定価金貳円、送料金拾四銭と書かれている。初版に定価の記載がないのは、市販されておらず、謹呈本だけが残っているためであろう。なお、再版本の奥付の前には「日本天文史料」の広告も掲載されており、そこには本文760ページ、定価金六円五拾銭、送料金貳拾貳銭と書かれている。

1978年11月31日に原書房から「日本天文史料上下 復刻版」が発行された。その最後に広瀬秀雄による「解説」が付け加えられており、そこに次のようなことが書かれている²⁾。

【「日本天文史料」は昭和九年度に日本学術振興会より出版費を受け、昭和十年に出版が完了したが、その出版費使用規定の関係上、本来本書は非売品で、その上刊行部数も非常に僅少であった。しかし、篤志入手希望者のため、丸善株式会社と恒星社に発行所として頒布を依頼する事ができた。】

「日本天文史料綜覧」の出版についても同じような事情であったと考えられる。

射場保昭が所有していた2冊の「日本天文史料綜覧」のうち、初版本の方には図1に示した「謹呈 神田茂」の短冊が挟み込まれていた。この蔵書には赤鉛筆で多数の傍線が引かれており、○、△、×、?などの書き込みも多く、射場がこの本を何度も読み直していた姿が目に見えてくる。

神田茂は、1934年から2年間にわたって「天文月報」の編集長であったが、彼の勧めにより射場保昭は、「天文月報」の1934年8月号から1936年9月号にかけて「望遠鏡並に天体写真に関する私見」と題した一連の和文論説を発表している。その最初の論説が掲載された1934年8月号の表紙には射場天体観測所所有の7インチ半屈折赤道儀の写真が使われている(図2)。

さらに同号の巻頭には神田編集長による次のよ

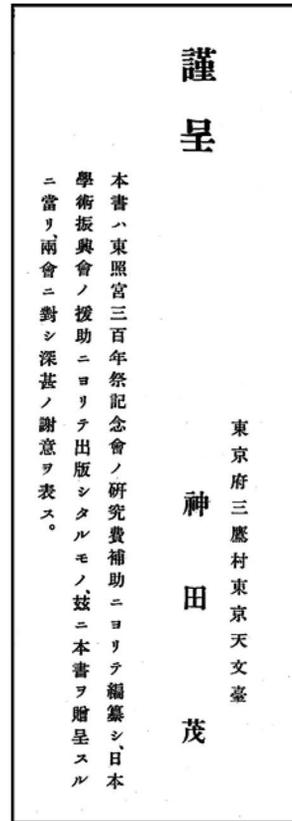


図1 「謹呈 神田茂」の短冊。

うな射場保昭の紹介文がある。

【射場氏は神戸に於て盛に天体写真関係の仕事に専念して居られる篤志家。一方に於て東洋の天文史関係の記事を自身で英文で印刷され、外国に配布して居られ、海外に於ける天文家の知遇も少なくない。】

これを読むと、この紹介文が掲載された1934年8月よりもかなり前から、神田と射場とは親密な関係であったことがうかがえる。神戸に射場天体観測所が開設されたのは1928(昭和3)年夏であるが、この私設観測所の開設については、アマチュア天文家の育成に熱心であった京大花山天文台の山本一清台長の働きかけのほか、神田茂の勧めもあったのであろう。

1931年に、射場保昭が書いた「Amateur Astronomy and Telescope Making in Japan」の報告



図2 天文月報1934年8月号の表紙。神戸射場保昭氏の口径十八糎赤道儀（レンズは故中村要氏作製のもの）。

が米国のPopular Astronomy誌の第39巻5月号に掲載され、その前後から射場と海外の天文学者との手紙のやり取りが大幅に増えた。1932年に、射場は「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」と題する全34ページのブックレットを自費出版して国内外の天文台などの関係機関のほか、知り合いになった海外の天文学者などに送付している。その後、中国大陸や朝鮮半島の天文古記録も含めてさらに調査し、APPENDIXやSUPPLEMENTが付け加えられて、計50ページを超えた。

1932年発行のカナダのJour. Roy. Astron. Soc., Canada誌の第27巻、45-46ページに「Old Astronomical Record in Japan」という記事があり、そこに神戸のYasuaki Ibaが「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」と題する全34ページの興味深いブックレットを英文で出版したと書かれている。これは、トロント大学のC. A. チャント

(Chant) 教授(1865-1956)が射場から送られたブックレットを読んで、紹介文を書いてくれたものである。チャント教授は、1904年から1907年までカナダ王立天文学会の会長を務めたほか、長年にわたりJour. Roy. Astron. Soc., Canada誌の編集に携わっていた。1932年2月23日にトロントで開かれたカナダ王立天文学会の例会で、チャント教授の推薦により、射場保昭はカナダ王立天文学会の会員に選ばれている。

この自費出版のブックレットの内容は、その後、1934年から1938年にかけて米国のPopular Astronomy誌に5編の報告に分けて掲載されている。このなかで、「明月記」の超新星を含む客星出現の記録の報告は同誌の第42巻(1934年発行)に掲載された。この年は、神田茂が「日本天文史料綜覧」を出版した年であった。

3. 射場保昭とPopular Astronomy誌編集長とのやりとり

射場の一連の報告がPopular Astronomy誌に掲載される前に、米国ミネソタ州ノースフィールドにあるカールトン・カレッジの教授でPopular Astronomy誌の編集長であったC. H. ギングリッチ(Curvin Henry Gingrich)教授(1880-1951)から射場保昭に送られた手紙が4通残されている。そのなかの1通の1933年6月16日付の手紙のコピーが図3に示されている。これらの手紙を紹介しながら、この二人の関係について述べておく。

① 1931年4月22日 射場保昭様

拝啓 「日本のアマチュア天文学に関するノート」が同封された3月31日付のあなたの手紙とその後の4月4日付の手紙も受け取りました。これらのノートを受け取って、私達は興味をもちましたし、嬉しく存じます。そこで私達は、5月に発行されるPopular Astronomy誌のなかに、これらを掲載するスペースを見出そうと努力しています。しかし、5月号の中身はほとんど埋まっているので、次

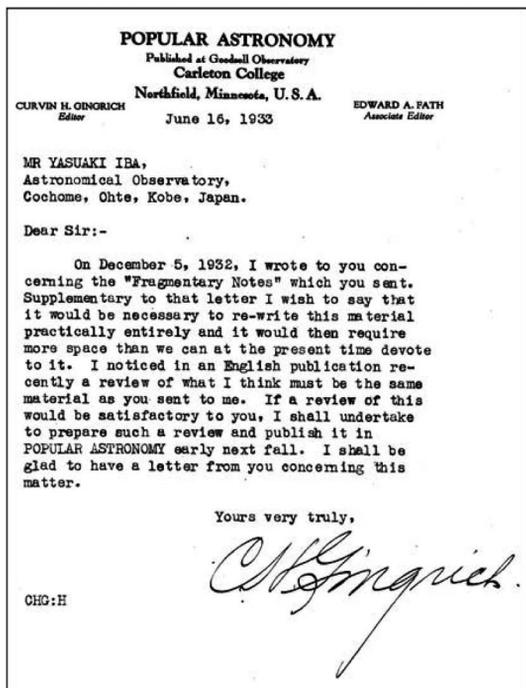


図3 ギングリッチ教授から射場保昭に宛てた1933年6月16日付の手紙のコピー。

の号まで延ばさなければならぬかもしれません。

山本一清氏は、彼の手紙のなかで、原稿に関して修正が必要な場合には直してもよいと示唆してくれました。あなたもこのことに同意してくれると信じます。

あなたに送られている Popular Astronomy 誌のコピーを見ればご理解いただけると思いますが、私達は名前の表記の仕方を変更させてもらいましょう。

数週間前、私は天体望遠鏡の印刷カタログをあなたから受け取りました。私はすでに Popular Astronomy 誌に「GENERAL NOTE」を書いていたのですが、あなたが送ってくれた追録に従って、それを修正しましょう。

今日の午後、私がカールトン・カレッジと法政大学の野球の対抗戦を見に行く予定であると言ったら、あなたの興味を惹くかも知れませんね。

では、あなたとあなたのお仲間のご成功をお祈

ります。

敬具

C. H. ギングリッチ

この1931年4月22日付のギングリッチ編集長からの手紙には Popular Astronomy 誌の第39巻5月号には間に合わないかもしれないと書かれていたが、射場の「Amateur Astronomy and Telescope Making in Japan」と題する原稿は、1931年3月31日受理という扱いになり、第39巻5月号の287ページから始まる「NOTES FROM AMATEURS」のなかの290-292ページに掲載された。この射場の原稿については京大花山天文台の山本一清台長がギングリッチ編集長宛に推薦書を送ってくれていたようだ。さらに、同じ5月号の最後にギングリッチが書いた「GENERAL NOTE」の302ページに「Telescope in Japan」と題する8行の記事が載っている。そこには、神戸のYasuaki Ibaが日本の天体望遠鏡のカタログをまとめて編纂したと紹介されている。

ギングリッチはこの手紙のなかで、彼が所属するカールトン・カレッジと日本の法政大学との野球の試合を見に行くという私的なことも射場に伝えている。この二人はもっと以前から親しく手紙のやり取りをしていたのであろう。

②1932年3月30日 射場保昭様

拝啓 興味深い写真プリントのコレクションを送ってくれたあなたの手紙は、あいにく時間的に間に合いませんでした。そのなかで参照している日本の天文学に関する1つの論文は、少し前に受け取りました。その後、あなたの論文で議論されたトピックのリストを含んだ2月11日付の手紙も既に届いています。しかし、「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」の原稿は、まだ手元に届いていません。私達は、この原稿を Popular Astronomy 誌に採用することに興味があります。原稿が到着して、それを読む機会が得られたら、内容を検討し、あなたに手紙を書くつもりです。

あなたが言っていた芸術的なランタン・スタンドの荷物は、まだ受け取っていません。私は単にご参考までにこれを言っているのであって、われわれがあなたへの感謝を怠っているとか、あなたの親切を認めないという風に見られると困ります。

敬具

C. H. ギングリッチ

ここに書かれている写真プリントのコレクションとは具体的にどんなものかはわからないが、射場天体観測所の観測装置を用いて得られた彗星及び小惑星や掩蔽観測などの天体写真の一部であったと思われる。次章で述べる「射場天体観測所一覧」（1936年6月発行）には、「流星雨に関するパンフレット」を500部印刷して配布したと書いてあるので、これを指すのかもしれない。

この手紙には、射場が予告した「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」の冊子はまだ届いていないが、届き次第読んでみて、内容をPopular Astronomy誌に掲載することを検討したいと述べられている。

手紙の後半に射場がギングリッチに送った日本製のランタンのことが書かれている。射場は、1932年2月にハーヴァード大学天文台のシャプレー台長宛に日本製のランタン1対を船便で送っているが、同年5月3日付でシャプレーから射場に丁寧な礼状が届いた。射場は、1932-33年にかけて、同じ形のランタンをお世話になった多くの外国人天文家に贈っている。そのうちの一人がギングリッチ教授であったが、1932年3月30日現在ではまだランタンが先方に届いていなかったようである。なお、先に述べたトロント大学のチャント教授からは、1932年5月4日付の射場宛の手紙のなかで、「美しいランタンを受け取って家族全員が喜んでいる」との謝意が述べられている。

③ 1932年12月5日 射場保昭様

拝啓 あなたが送ってくれた11月9日付の「Frag-

mentary Notes」に言及した手紙は、数日前に届きました。また、「Fragmentary Notes…」の冊子は、たった今、受け取りました。私にはあなたが送ってくれた原稿の全体を通して読む時間がありません。しかし、私の最初の印象では、Popular Astronomy誌にこれを採用する前に、かなり原稿の改訂が必要であると思います。私は、なるべく早く原稿を読み、数日のうちに再度あなたに手紙を書きます。

数ヶ月前にハーヴァード大学天文台に滞在していたとき、シャプレー博士の家にあったランタンに私の注意は惹きつけられました。それは、あなたが私に送ってくれたものとよく似ていました。問い合わせてみると、それはまさに同じ送付先から届いたものだわかりました。私はとても興味深く思いましたが、あなたが私に送ってくれたものをわが家でみんな大変喜んだのと同じように、シャプレー博士と彼の家族もとても喜んでいました。

敬具

C. H. ギングリッチ

射場がギングリッチに送った「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」の冊子は、1932年12月の初めに先方によく届いたようだ。ただ、これをPopular Astronomy誌に掲載するには、体裁や内容でかなりの手直しが必要と告げている。

射場が送った日本製のランタンも大分前にギングリッチのところに届いていて、彼は数カ月前にハーヴァード大学天文台に行ったとき、シャプレー台長の家で同じものを見つけたという。シャプレーの一家も喜んでいたし、わが家でもみんな喜んでいと書いてある。

④ 1933年6月16日

拝啓 私は、あなたが送ってくれた「Fragmentary Notes」についての手紙を1932年12月5日にあなたに書きました。その手紙の補足として次の



ことをお伝えしておこうと思います。つまり、この原稿を實際上完全に書き換えることが必要で、それに伴い、現時点で我々がこの原稿のために割こうとしているスペースよりも多くのスペースが必要となるでしょう。最近の英語の出版物において、私が考えている“レビュー”とは、まさにあなたが私に送ってくれたものと同じようなものであるに違いないと私は思いました。もしこの種の“レビュー”があなたにご満足いただけるなら、私は、そのような形の“レビュー”を準備することを請け合い、Popular Astronomy誌上で来年秋までの早い段階でそれを出版するでしょう。この事に関してお手紙をいただければ幸いです。

敬具

C. H. ギングリッチ

ギングリッチ編集長から1933年6月16日に上記のような連絡が届いてから1年近く後に、「明月記」に記載されている超新星を含む客星出現の記録の紹介を含めたY. Ibaによる「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」の第1報は1934年発行のPopular Astronomy誌第42巻5月号の243-252ページに掲載された。その最初にギングリッチによる16行の紹介文がある。

さらにその続篇は、ギングリッチによる編集作業を経て、Vol. 45 (1937), 301-310ページ, Vol. 46 (1938), 89-96ページ, Vol. 46 (1938), 141-148ページ, Vol. 46 (1938), 263-267ページに掲載された。「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」は、全体でPopular Astronomy誌の41ページを占めている。

このような経緯を経て、射場保昭が長年かけて準備した日本の天文学に関する英文報告が米国の著名な天文雑誌 (Popular Astronomy) に掲載されたことで、「明月記」に超新星を含む客星出現の記録が残されていることが世界の天文学者に広く知られることになった。

4. 井本進の射場天体観測所への貢献

オーストラリア留学の経験がある射場保昭が英語に堪能であったことはよく知られていたが、残された射場の手紙類を見ると漢文の素養もあったことがわかる。神田茂はこのような射場の経歴を知ったうえで、自ら編纂していた「日本天文史料綜覧」と「日本天文史料」の刊行前に、彼が集めた天文暦学史料と天文記録の基礎データを射場が閲覧することを許し、また、その要約をPopular Astronomy誌に投稿することを彼に勧めたと考えられる。

射場が「Fragmentary Notes on Astronomy in Japan」の英文冊子をまとめるに当たって、このなかの「明月記」に関する情報は、神田茂が東京天文台や東京大学史料編纂所などから集めた資料から採訪したと考えられるが、もう一つの可能性は、射場天体観測所の客員研究員であった井本進 (1901-1981) から情報提供を受けたとも考えられる。

冷泉家時雨亭文庫調査主任である藤本孝一・龍谷大学客員教授から教えていただいた情報によると、「明月記」の出版は、江戸時代までは写本しかなく、活字本としては、国書刊行会から1911(明治44)年に3冊本として出版されたものしかないという。神田茂は、この「明月記」の活字本にも当然目を通していたと考えられるが、一方で、独自に天文史料を集めていた井本進のコレクションのなかに国書刊行会発行の「明月記」も含まれていたとすれば、それを読んだ井本が「明月記」に超新星を含む客星出現の記録が残されていることを射場に伝えたということも考えられる。井本進が集めた史料は「井本文庫」として残されていたが、いまは散逸していて残念ながら所在不明である。したがって、井本進が集めた資料のなかに国書刊行会の「明月記」が含まれていたかどうかは、いまとなってはわからない。いずれにせよ、射場保昭が「明月記」に記載された膨大

な項目から超新星を含む客星出現の記述を抽出する作業の過程で、射場天体観測所の客員研究員であった井本進の貢献が大きかったと考える。

1936(昭和11)年6月に「射場天体観測所一覧」という、表紙のほか6枚の写真と4ページの説明から構成された小冊子が発行された。その説明の最後のページに「射場観測所の観測並に事業」という項目がある。少し長くなるが、神田と井本に関する記述があるのでそれを引用しておく。

【専念しつゝあるは主として専門家と共同し、彗星及び小惑星の観測並に之が掃写にして外に恒視圏内星空の撮写、並に掩蔽観測をも実施しをれり。加之専門家の指令に依り特殊観測をなし研究資料を提供しつゝあり。

事業として記すべきものは同好の士よりの諸事相談に応じ居る外、皇国及び東洋に於ける豊富なる天文史料未だ海外諸国に知れをらざるを慨し、神田茂先生のご支援並に客員井本進氏の協力を得、蒐集せる資料を独力翻訳出版の上、外国関係筋に配布しつゝあり基の反響頗る多大にして各国専門雑誌に転載され、英、米、独、西、蘭、伊、南欧、南米、豪州及び南阿等に於ける第一流天文家各位を初め、各大学、天文団体よりの申込、陸続としてたえず、最近配布せる流星雨に関するパンフレットは部数500に達せるの盛況を呈するに至れり、斯くして従来埋れたる皇国古代文化を遍く四海に紹介し以て国威宣揚の一助となし得たるは当観測所の密かに光榮とする所なり。

本事業は更に継続する予定にして海外よりの要望予期以上熾烈なるを見るは感銘に不堪次第なり。】

ここには、射場保昭が「明月記」に記載されている超新星を含む客星出現の記録などを英文で海外に紹介した際の協力者として神田茂と井本進の名が挙げられている。射場保昭と井本進の関係については、富田弘一郎による次のような紹介文が

ある³⁾。

【同じ神戸在住のアマチュア天文家井本進氏は、日本の古暦書の収集家として有名でした。

1934年、W.バーデとF.ツウィッキーが超新星の存在を発見し、その残骸の1つとして、おうし座の「カニ」星雲M1を指摘しました。

井本氏は所有していた古書の中の、藤原定家の明月記に、「天喜二年四月中旬以後、丑時客星出觜参度、見東方、葶天関星、大如歳星」と記されている天体が、この現象であることを初めて指摘しました。ユリウス暦では1054年5月に相当します。

射場氏はこの事実をいち早く、アメリカのポピュラー・アストロミー誌に投稿して、世界中に広く紹介しました。わが国にはこのほか一代要記にも同じ超新星の記事があり、中国の記録とともに公認されています。】

また、「日本アマチュア天文史」に大崎正次が次のように井本進を紹介している⁴⁾。

【井本氏はながく神戸市に在住された東亜天文学会の古い会員の一人である。商事会社に勤務され、戦前は各地の古書店を通して、日本の古暦書収集家として知られていた。その井本文庫も今は散逸してしまったとのこと、まことに残念である。…(中略)…しかし日本におけるアマチュアとしては、本格的な天文学史の草分けであり、遺されたものなかには貴重な論文も数えられる。】

さらに、射場保昭が「天文月報」に寄稿した「望遠鏡並びに天体写真に関する私見」の一連の論説の附録2(第29巻、第9号、152-156)に、井本進に関して次のように書いている。

【吾人アマチュアには天界巡礼及び観測以外にも重要な仕事がある。天文史料の調査研究が夫れである。井本進氏が忙中閑を得て克苦精励の結果見出されし資料は決して僅少で



はないのである。】

このように射場保昭は、井本進の天文史料の調査研究を高く評価していた。

射場保昭のご次男である射場満家氏から直接お聞きした話では、満家氏の少年時代に射場家に一番よく泊まりがけで来ていた人は、客員研究員の井本進で、勤皇志士が多い山口出身で山口高等商業学校の出身だと聞いたことがあるという。満家氏は、当時西宮に住んでいた井本進の案内で、西宮戎に連れて行ってもらったことも強く記憶に残っているそうだ。

満家氏の説明によれば、射場天体観測所の維持及び観測には井本進のほか、射場家に住み込みで働いていた善野誠助が手伝っていたとのことである。善野夫妻は滋賀県守山市出身で、昭和の始め頃より神戸市大手町にあった射場家の家事全般や使い走り、天体望遠鏡の出し入れ、器材の手入れ、天体観測の手伝い、乾板写真の現像などを受持ち、終戦時まで勤めていたという。夏休みには善野夫妻に連れられて守山に蚩狩りに行ったこともあったとのことである。

1934年発行の天文月報、第27巻、第3号に石井重雄が「昨年十二月二十日に於ける金星、土星の掩蔽の観測記録」という論説⁵⁾を発表しているが、そこに1933年12月20日の夕刻16時頃に金星が、続いて18時頃に土星が月齢3日の月に掩蔽された際に、神戸の射場保昭が井本進の助力を得て7枚の写真撮影に成功したと書かれている。また観測結果の表にはアマチュア天文家を含めて多数の観測者の名が挙げられているが、神戸の観測者として射場保昭のほか善野の名前もある。

この石井による1933年金星・土星の掩蔽の観測報告のなかに、上海の今井溱（いたる）（1906-1990）、三鷹・東京天文台の窪川一雄（1903-1943）の名前があることに興味をひかれる。今井溱は長崎で生まれ育って、1926-32年に東京天文台に勤務し、理科年表係の室長であった神田茂のもとで彗星の軌道計算などを手がけていた。その後、

1932-43年には新城新蔵が所長の上海自然科学研究所で、主に中国科学・技術史の研究に従事した。1943年に風土病による腸疾患の病を得て帰国し、京都で療養していたが、1951年より京大理学部地球物理学科の西村英一教授のもとで上賀茂地学観測所の技官となり、1971年に定年を迎えた⁶⁾。射場保昭と井本進が射場天体観測所で観測をしたり、天文古記録の整理をしたりしていた昭和の初めの時代に、彼らと今井溱との直接の交流はなかったと考えられる。しかし、中国の天文古記録の蒐集に興味をもっていた射場や井本は上海での今井の活躍を注目していたに違いない。後年、井本進は、古代暦法や和算の研究会などで今井溱と親しくしていた可能性が考えられる。「科学史研究」第17号（1951）に井本進の「日本最古の古典に現われた暦日の研究」、同第40号（1956）に今井溱の「奈良朝前後の暦日」の論文があるほか、近畿数学史学会誌「和算」の創刊号（1971）に今井溱の「水度神社算額の周辺」、同第2号（1973）に井本進の「探書余滴一毛利重能の事蹟をめぐって一」の報告があるからである。

東京天文台の技師であった窪川一雄は、1938年に台湾総督府気象台附属天文台の技師・気象台副台長として台湾に赴任する前から射場保昭と交際があった。1941年9月21日に台湾で皆既日食が見られたが、この観測に窪川は、射場天体観測所の観測器材（8インチ反射赤道儀を含む）を使用したという。

日食観測終了後、窪川が射場家にお礼を言い訪れた。射場満家氏は、このときの印象を彼が着帽していた白いヘルメット帽子を雑誌「少年倶楽部」で見た「冒険ダンキチ」のようだったと思ったと語ってくれた。窪川はこのとき、台湾の高砂民族の舞踊姿と背景に農村風景が描かれた額を置いていったという。踊る男子5名の顔の部分に白い貝が埋め込まれていたのが印象的だったそうだ。

1938年5月31日に京大を依願退職した山本一清は、1941年9月21日の皆既日食を台湾の富

貴角で観測したが、この観測隊に東亜天文学会の井本進ら8名が参加している。井本進はこのときにも窪川一雄に会っていたと思われる。

5. おわりに

射場保昭が「明月記」に記載されている超新星を含む客星出現の記録を米国のPopular Astronomy誌に紹介したことが、オランダのオ르트(Oort)が1987年の第3回京都賞・基礎科学部門を受賞したきっかけとなったことは既に本誌で紹介した⁷⁾。

2014年9月3日-10月19日に京都大学総合博物館で「明月記と最新宇宙像」という特別展が開催された。このなかで「射場保昭—明月記を世界へ」も展示の中心の一つであった。この特別展の準備を進めるなかで、京都情報大学院大学の作花一志教授から「射場保昭は明月記に超新星を含む客星出現の記録があることをどうして知ったのか？ 明月記そのものを読んだのか、それとも客星の件はだれかが抽出してあったのか」という質問があった。

そこで、超新星を含む客星出現の記録が「明月記」に記載されていることを射場保昭がどこから知り得たかを調べて見た。その結果、射場が直接「明月記」を読んだのではなく、神田茂が東京天文台や東京大学史料編纂所などから集めた資料から「明月記」のなかの天文古記録の存在を射場に伝えたか、射場天体観測所の客員研究員であった井本進が独自に集めた天文学史料のなかに1911年発行の「明月記」活字本(国書刊行会)が含まれていて、そこから情報を得たかのいずれかであろう。いずれにせよ、射場保昭が「Fragmentary notes on astronomy in Japan」の英文報告をまとめる作業のなかで、身近な存在であった井本進の貢献が大きかったと考えられる。

なお、作花一志教授の計らいにより、1997年2月1日に群馬県的小林隆男氏が発見した小惑星(9432)が、射場保昭の業績にちなんで2014年9

月10日に国際天文学協会小惑星センターより「Iba」と命名された。

謝 辞

本稿をまとめるにあたって、貴重な資料を提供していただいた射場満家氏に厚く御礼を申し上げます。また、内容に関して、多くのご教示をいただいた藤本孝一・龍谷大学客員教授と作花一志・京都情報大学院大学教授に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 佐久間精一, 1987, 変光星・新星(第10章), 日本アマチュア天文史, 恒星社厚生閣, 159-208.
- 2) 広瀬秀雄, 1978, 「日本天文学史料」解説, 日本天文学史料 上下 復刻版, 原書房, 761-768.
- 3) 富田弘一郎, 1995, アマとプロのリエゾン・温故知新 廣瀬秀雄さんとアマチュア, 天文ガイド (INTERACTIVE), Vol. 1, Spring号, 41-52.
- 4) 大崎正次, 1987, 天文学史(第17章), 日本アマチュア天文史, 恒星社厚生閣, 367-374.
- 5) 石井重雄, 1934, 昨年十二月二十日に於ける金星, 土星の掩蔽の観測記録, 天文月報, 第27巻, 第3号, 47-53.
- 6) 竹本修三, 2010, 上賀茂地学観測所時代の今井溱氏, 京大地球物理学研究の百年(II), 127-128.
- 7) 竹本修三, 2013, 屈折・反射望遠鏡に関するエインスリー対ウォーターズの論争に加わった射場保昭, 天文月報, 第106巻, 第10号, 675-683.

Companionship between Yasuaki Iba and Shigeru Kanda, Susumu Imoto in Relation with “Meigetsuki”

Shuzo TAKEMOTO

JEIN Institute for Fundamental Science, 5-14 Yoshida-honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8317, Japan

Abstract: Yasuaki Iba is an amateur astronomer who introduced ancient records of supernovas in Japan to the journal of Popular Astronomy in 1934. Shigeru Kanda and Susumu Imoto informed Iba that ancient astronomical records were described in Meigetsuki and they helped Iba to write English reports about this. Recently, four interesting letters from Prof. C. H. Gingrich to Yasuaki Iba were found. Prof. Gingrich was the editor of the journal of Popular Astronomy.